

12月



あの日のあの川 リレー日記 ～第41話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第41話主人公 岡萌野

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：愛知県堀川)

「君は川が好きか？」

いつのこと？：小学生の頃

どこの川？：堀川

私は川が好きだ。車で川に掛る橋を渡って「川だああ！」と叫ぶのも好きだし、知らない街を歩いていて川を見つけると思わず近くによって水面を覗き込んでしまう。一方で、その川がなんて名前前の川なのかとかあんまり興味持ったことない。その川が、当たり前のようにその街の景観の一部になっていて、そこに住んでいる人にとっては身近で大切な川だったら、私にとっては名無しの川でもなんだかかっこいいではないか。

ということで、私にとって身近で、川と聞いて真っ先に思いついた地元の堀川について書こうと思う。

そもそも堀川は自然にできた川ではなく、江戸時代の初めに名古屋城の築城と同時に開削されたという。昔は鉄道などの物流手段が整っておらず、水運が発達した。花見など、人が集まる憩いの場でもあったという。しかし戦後に、水質汚濁が進み一時期は「死の川」とまで呼ばれたそうだ。

地元の川の思い出といえば川辺で水遊びしたとか釣りをしたとか、思い浮かぶ。しかし元「死の川」である堀川はそんなことができるような川ではなかった。川の近くに大きな公園があってそこで遊ぶ時は(ほぼ毎日だけ) 毎回堀川とご対面していたが、川の色は黒に近く水面は小さな泡がポコポコ出ている、夏場は近づくと



↑白鳥船着場

臭い時もあった。「堀川を超えた(橋を渡った)所には遠いからいたらダメだ」と親に言われていたこととか、或る日突然川の水位が上がりがいつも人が歩いているところまで水が来ていて「これが月の引かってやつか？」(潮の満干の理由を習ったばかりだった)とか思ったりしたことが、比較的印象に残っている思い出だろうか。

そんな堀川は学校の授業でも取り上げられた。地元の何かの団体のおじさんが学校に来て、前述したような堀川の歴史と、清流化に向けてヘドロを除去していること、水面に浮かんでいる泡はヘドロから発生しているガスだということなど教えてくれた。戦争の歴史も残っていたり。一番驚きだったのは、堀川にオオサンショウウオがいると聞いた時であった。オオサンショウウオは水のキレイな場所に生息するのになぜ堀川に！？…その理由は、生息が確認された場所が、地下水が湧き出していたり、地下水が放流されていたりと水質が比較的キレイだったからだとのこと。汚い堀川なのに、そこで生きてくれているととても嬉しかった。ヘドロだけじゃないんだなと少し。

そんなことを思い出しながら、今堀川に来てみている。当時は何も意識していなかったけれど、兩岸には遊歩道が整備されていて自転車でも走りやすく、ジョギングしている人も何人かすれ違った。遊歩道を挟んで隣接している白鳥公園は、小さい子連れの親子や犬の散歩をしている人がちらほら。確か私もお母さんとここで昼ご飯食べたことあったなあとか思い出した。で、一番川に近づける場所に来てみたら…！！！！



↑溢れる堀川

月の引カ！！！！

まさかの今！そうそうまさにこんな感じ！普段は柵のところまで行ける。水がはけたばかりの時はヌルヌルと滑りやすく、スケート～とか言って遊んでいた気がしなくもない。本当に潮の満干が関係しているのかは謎だけれど、そういうことにしておく。

臭いもしなかった。その上、紅葉の時期終盤なので、公園の木々がとても綺麗で遊歩道を彩っていた。ちなみに春は桜並木になる。花見がてら公園でBBQをした覚えもある。最高だ。まさに川沿いは散歩やジョギングにもってこいである。1週間で終わったが、かつて私も朝川沿いをジョギングしていた。(終わった理由は決して川のせいではなく、走るやる気がなかったから。)

ちなみに夏は、熱田まつりという地元のお祭りで、花火が近くの球場で打ち上げられ、川沿いは人で埋まる。

私が知っているだけでこんなにも、堀川の魅力がある。当時は当たり前のように享受していたけれど、改めて考えるとなんていい街だろう名古屋市熱田区。その魅力の一つに堀川は入ると思う。

今でもオオサンショウウオは生きているのだろうか。どちらだとしても、私にとって堀川はオオサンショウウオを生かした川だし、それだけでもなくなった。

通りすぎる人にとっては、なんでもない川。なんならドブ川。でもそこに住む人にとってちゃんと自慢できるかっこいい川になっている。だからやっぱり私は川が好きだ。



↑国際会議場を眺めながら毎日遊んでいた。めちゃくちゃ広くて遊び甲斐しかない。

(次号は2月号にて大泉達也さんにバトンを託します)